

# スポーツと労働をめぐる遊戯論的考察

—リガウアとグートマンを越えて—

樋口 聡  
(1992年9月30日受理)

Sport and Work from the Viewpoint of Play Theory  
—Beyond Rigauer and Guttman—

Satoshi Higuchi

Bero Rigauer criticizes the situation of modern sports in his book *Sport und Arbeit* (1969). He declares that sport is merely disguised work and it has become specialized, bureaucratized, inhumane, and repressive.

Allen Guttman translated this book into English in 1981. In the protracted translator's introduction to *Sport and Work*, Guttman estimates the Rigauer's book as a radical criticism first appeared in systematic form. He considers that Rigauer's criticism is not based on that instinctive dislike of physical activity which has traditionally characterized a number of intellectuals but rather on a belief in the importance of play.

However, Guttman places himself on the critical standpoint in opposition to Rigauer as a Neo-Marxist. He concludes that the Neo-Marxist's argument against modern sports is exaggerated and a partial truth at best.

In this paper, I critically considered both of Rigauer's *Sport and Work* and the Guttman's criticism from the viewpoint of play theory which would be further connected with aesthetics. I suggested the necessity of a new conception of play and work rather than a new conception of sport.

## 序にかえて

—カール・ルイスの本業は何なのだろう?—

スポーツのアマチュアリズムをめぐる素朴な疑問から出発しよう。手がかりは橋本治のエッセイである。

「(カール・ルイスは)オリンピックに出て来るんだから、プロの陸上競技の選手じゃないことだけは確かだが、しかしあの人の“本業”が何なのかは知らない」。—いまやオリンピックにはプロの選手の参加も認められているのであるから、オリンピックに参加することをもってその競技者がプロではないとは言えない時代となってしまった。しかし、カール・ルイスはやはりプロの陸上競技の選手ではない。なぜならば、プロ野球と同じようなプロ陸上競技などというものが存在していないからである。20年も前に、一時プロ陸上というのがあって、東京でもそのショーが開催されたことがあったが、それは存続しなかった。プロ野球や大相撲などのような興業の基盤が作れないのだろう。プロという組織的な受け皿がないという意味では、どんな世界記録を作ってみても、どんなスーパースターになったとしても、カール・ルイスはプロになることはできない。

とすると、カール・ルイスは、真正正銘のアマチュアだということになるのだろうか。聞くところによると、彼は自分がデザインしたウェアを中心に販売するスポーツウェアの店を経営しているという。その「職」を持つ以前は彼はヒューストン大学の学生であった。学業やスポーツウェアの小売業という「本業」のかた

わらに陸上競技の短距離と走り幅跳びを趣味で愛好するアマチュア、などとカール・ルイスのことを言うのであれば、違和感を持つ人は少なくないだろう。確かに、公的な履歴書などの書類に書かれる彼の「本業」はそのようなことになるのだろうが、彼は、もっぱら陸上競技の選手をやっているだけで、あるいはそれと関連することがらにおいて、莫大な収入を得ることができているのである。「本業」は空白のままでいいのだ。そうすると、陸上競技によってカール・ルイスは生活のための十分な金銭収入を得ているのであるから、その意味ではプロだと言わざるを得ないのではないか。その場合は、「本業」は「陸上競技選手」と書くべきことになるだろう。

ところで、「全盛を極めて引退してプロへの転向を果たした選手は、アマチュアよりも技術や記録に於て“上”なんだろうか？」——野球や相撲などプロというシステムが出来上がっているスポーツのいくつかではそうだろう。しかし、例えばアルペンスキーを見てみよう。最高の技術が展開される場は、言うまでもなくワールドカップ、そしてオリンピックの世界である。アルペールビル・オリンピックでのイタリアのトンバの回転の2本目の滑りなどは、最高の技術に支えられたパフォーマンスの傑作である。ワールドカップのレーサーたちは、いまのところ建前上は（カール・ルイスと同様）アマチュアである。一方、プロのスキーというのものもある。プロスキーヤーにはおおよそ二種類あって、一つはプロレースのレーサーであり、もう一つはいわゆるレッスンプロ（スキー学校の教師）である。はじめからこうした「プロ」を目指す人もないわけではないが、一般的には、ジュニアからインターハイ、インカレ、国体、全日本選手権、オリンピックそしてワールドカップとつながるアマチュアの路線を経て、全盛を極めて（あるいは全盛を極めることができずに）引退してプロになるケースが多い。ということは、スキーに関して言えば、プロよりもアマチュアの方が技術的には上である<sup>2)</sup>。

さて、このようなスポーツ界の現状把握から何が理解されるかと言うと、プロとアマチュアの区別をめぐる二重の意味である。プロとアマチュアを何によって区別するかと言えば、まず思い付かれることは、金銭的報酬（あるいは物質的利益）の受領の有無であろう。金をもらえばプロであり、もらわなければアマチュアだというわけだ。しかし、もう一つの意味がプロとアマチュアの区別にはあり、われわれは時と場合によってその区別を使うことがある。すなわち、プレイヤーの持っている技能の差を表す意味での区別である。「スキーのプロ」と言えばそれは「すごくうまい」と

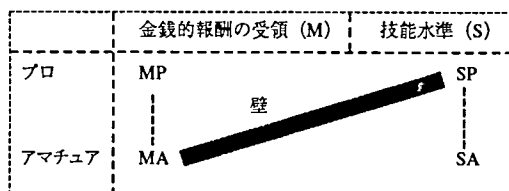


図1 プロとアマチュアの区別をめぐる二重の意味

ほとんど同義であり、逆に「アマチュアのレベル」は「ほどほどの技能水準」あるいは「下手」を意味する。

図1を参照してみよう。「金銭的報酬の受領」(M)と「技能水準」(S)の二つの意味のそれぞれにプロとアマチュアの区別が考えられる(MP/MA, SP/SA)。前者「金銭的報酬の受領」は通常の場合、職業と結び付いていく。プリミティブな職人芸の場合を考えてみると、工芸品を彫琢する職人がそれを職としうるのはその人の腕にかかっている。彫刻刀も満足に使えない下手な人は、仕事にあふれ早々に廃業か転職しなければならぬ。「金銭的報酬の受領」という意味でのプロ(MP)と「技能水準」のプロ(SP)はパラレルな関係を保っている(MP=SP)。このような関係の中で考えてみれば、スポーツが職業として成立しうると社会的基盤を獲得できさえすれば、カール・ルイスのような技能水準のプロ(SP)が金銭的報酬を得てプロ(MP)となっていくのは自然である。その社会的基盤の整備の可能性は、マスコミの急速な発達などとともに、かなり早い時期からあったであろう。しかし、スポーツ界には、特にオリンピックにつながるいわば正統なスポーツの世界にはアマチュアリズムという思想があって、スポーツの職業化を拒み続けてきた。アマチュアリズムは確かに一つの思想であり、それを一つのイデオロギーとして扱えばアマチュアリズムに関する哲学的な議論が成立するであろう。しかし、われわれの論考の文脈で語れば、アマチュアリズムはいわば図1のSPからMAに築かれた(東西を隔てる)壁にすぎない。その壁は徐々に蝕まれてきていたが、サマランチ時代に一挙に崩されてしまった。まさに「時代が変わった」のだ。

さらに、時代の変化は単なる壁の崩壊にとどまっではない。橋本が眩くように、「その人の“属性”に対して金を払う人間が出て来た——その結果、その人の属性が付加価値を生んで商売が成り立つようになった」。つまり、壁の時代には、SAからSPに至る軸上のすべての点はMAと結びなさいという命法がスポーツ界を支配していたが、壁が崩壊した現在、個人的な趣味は別として、その命法は公的な規制力を失った。すべてがオープンになると、先に示したプリミティブな

職人芸の場合のように、原理的には、MP — SPのラインに平行な線分が無数に引かれることになるだろう。技能に応じて報酬を、というわけだ。しかし、時代の変化はさらに複雑な状況を投げかけている。MA — MPの軸とSA — SPの軸の間は可能であればどのような線分で結んでもかまわないというのが、まさに現代的状況であろう。金銭的報酬という経済的な価値は、もっぱら技能水準によって決められるほど単純ではなく、他の才能を持ち込めば、たとえ技能水準のレベルが低くとも多大な金銭的収入を上げることが可能な世の中なのである。スキーの技能はそれほどでなくとも、工夫次第で、「私はプロだ」と宣言して金が稼げる時代なのである。

さて、このようなスポーツと経済をめぐる現代的状況に、われわれはどのように対処すればいいのだろうか。このような状況を放任すればいいのだろうか、あるいは先に崩壊した壁に代わる新たな壁を築くべきなのだろうか。スポーツは、オリンピックに象徴されるように、いまや現代社会の巨大な制度の中で経済や政治や教育などとの複合的な関係の網に絡めとられることを免れ得ないとすれば、「こうすればよい」といった予言的発言は現実的な意味を持つことは少ないであろう。「よい」といった価値付けもまた、社会や歴史との相対的なコンテクストにおいてしかあり得ないからである。とすれば、学問としてのスポーツ哲学を企てるわれわれの基本的視座は、スポーツに対する絶えざる批判的なまなざしということになるだろう<sup>3)</sup>。

以下、本稿において、スポーツに関する社会哲学的な基礎的問題の議論の検討を行う。それはスポーツの本質問題への溯及へと通じるものであり、筆者は美学的観点から遊戯論への接続を念頭に置いている。それはまた、カール・ルイスの本業は何であると考えのかに結び付く問題であることを示唆しておこう。

## 1 スポーツは労働か

### —リガウア『スポーツと労働』について—

まず、「アマチュアリズムの本質」と称する井上のパナールな文章を引用しよう。

「アマチュアリズムはスポーツの本質に関しているということが出来る。すなわち、スポーツ活動はそれ自体に目的をもっており、その活動の過程において技術や勝利を追求するところの自己目的的活動である。また、スポーツは自らの活動以外に他の目的を持たない身体活動であるということが出来る。それに反して仕事や労働は生命や生計保持のための活動、すなわち

その身体活動以外の物質的、社会的利益を得ようとする結果に拘束された活動である。したがって、スポーツ活動は本質的に仕事や労働と異なる活動であるといわなければならない。」<sup>4)</sup>

この文章は、すでに30年前に書かれたものであり、われわれが直面しているスポーツの現実には井上が言うような「スポーツの本質」を体現しない形で展開してきているが、ここに現れている考え方の枠組み（あるいは考え方の好み）はいまだに生きているであろう。スポーツと労働は目的が違う、それゆえにスポーツと労働は異なる活動であり、したがってスポーツはアマチュアでなければならない、というわけだ。

このスポーツと労働の関係の問題を論じた著作に、ペロ・リガウアの『スポーツと労働』がある。この本は、そもそもドイツ語で1969年に出版された。リガウアの論の展開は、マルクーゼ、ホルクハイマー、アドルノ、ハーバーマスのいわゆるフランクフルト学派の批判哲学に依拠するもので、『スポーツと労働』はスポーツ批判の書であった。先の井上の文章は1961年のものであるが、そこに見られるような当時のスポーツ論のおそらく主流であっただろうと思われる考え方が、まさに批判の対象になっている。したがって、公刊後いろいろな反響、批判が出され、リガウアは、それらの批判に対する簡単な回答を付して1979年に第2版を出している。それをグートマンが1981年に、長文の訳者による序文を付けて英訳している<sup>5)</sup>。この英訳本を、「スポーツと労働」という基礎的問題をめぐるリガウア、グートマン、さらに無名の批判者らの議論の展開と見なし、それをここに検討の対象とする。

リガウアは、『スポーツと労働』の冒頭、「スポーツは自立的な行動システムではない」と述べ、「スポーツは初期の資本主義のブルジョア社会に起源を持つ多くの社会的な事象と並行関係にある」という見解を示す。「規律・訓練、権威、競争、達成、目標を目指す合理性、組織化と官僚主義化などの基本的な特徴は、現代の産業社会の生産的労働と同様にスポーツにも観察される<sup>6)</sup>」というのだ。ここに、リガウアの社会学者としての立場と彼のスポーツ—労働問題についての基本的見解が明らかになっている。

第1部「スポーツと労働」は17の章から成っているが、まず、スポーツ—労働問題に関する二つの解釈が提示される。すなわち、(i) スポーツと労働は対立的に構造化された行動システムであるという、カール・ディームらに代表される一般的な見解、そして(ii) スポーツと労働は構造的に類似的な行動図式を持っているとする見解である。リガウアは後者を支持

するのであり、その論拠を以下第1部において述べていく。その論拠の鍵概念は「達成原理 (achievement principle)」である。この場合、達成とは、活動それ自体の生産物あるいは賃金などの付加的生産物を獲得するという労働の目的 (リップマン) を実現することを意味している。リガウアが言うには、「経済的に組織された産業社会では、市場における競争がなされ、それが達成への志向を生む。物質的な所有が拡大すればするほど個人の経済的、社会的地位が向上する社会においては、ドグマ的な世界観が達成の向上を煽る。そして、達成が、高い生産性、経済的な競争、物質的報酬、職業的実践、そして社会的な昇進可能性に関わる行動の社会的に認められたモデルとなった。この達成原理は、クーベルタンのくより速く、より高く、より強くに象徴されるように、トップレベル・スポーツの中に組み込まれ、まさに近代スポーツの典型的な性格を形成していったのである<sup>9)</sup>。

「人間の手を離れて社会的な強制力を持ってきた達成原理は、一つのイデオロギーとなる。その実現のためにく合理化という概念が産業社会の重要な指針となった。その結果、スポーツの世界にも、専門化、階級化、数量化、細分化、官僚主義 (管理) 化、役割システム化、科学化が進展する。そして、社会的労働と同様に、競技者個人の能力は、抽象的で数量化された商品へと形を変えられ、その商品はそれを生み出した人間から離れて、特別な市場において交換可能となる。要するに、スポーツと労働は対立的な行動システムであるとする説は一般化はできず、それが妥当であるとするれば、達成を志向しないスポーツに限定されねばならない。同様に、スポーツと労働は類似する行動システムであるとする説は、達成が強調されるトップレベル・スポーツの領域についてのみ妥当である」。しかし、リガウアは次のように付け加えることを忘れない。すなわち、「今日、トップレベル・スポーツがスポーツのシステム全体に対して影響力を持っており、上の第二の説は、スポーツ一般にも当てはまるようになっている。第一の説は、スポーツと労働を取り巻く客観的な関係を隠蔽しており、スポーツに対する不正確で歪曲された理解は、この説を選択しがちである<sup>8)</sup>。

さて、第2部は「スポーツとイデオロギー」であり、「スポーツの競技の形態は、その目的から自由な遊戯の性格ゆえに、目的を志向する労働とは一線を画するものである」という、第1部で指摘された第一の仮説や、達成原理の支配=浸透をイデオロギーと見なし、リガウアは、産業社会における近代スポーツのブルジョア・ロマン主義的傾向を指摘する。「スポーツ

の官僚主義化は、産業社会に典型的な管理方式をスポーツにもたらした。このような社会的に規定される行動様式に共通して見られることは、人々の健康、く自由く教育、リクリエーション=再創造、く労働に取って替わるうるものなどといった、誇張されイデオロギー化された目標である。スポーツと労働の社会学的、発生的な結び付きは否定されている。スポーツ競技の行動のためにコード化された規範の多くは、中産階級の規範に似ている。いわくく自分で目標を定めよくく自分の課題に真面目に取り組み云々。スポーツは分離された活動ではなく、参加者は社会の関係の枠組みの形式と内容に従うことを余儀なくされる、社会化の装置なのだ<sup>9)</sup>。

リガウアは、「スポーツの新たな理解に向けて」結論を提出する。イデオロギー化や疎外を越えてスポーツに対する新たな見解を示すための条件を、次のように語る。「1. 労働と似たスポーツの行動の構造を解体すること。そのためには、抑圧的な合理化を放棄し、達成の物神化を明らかにしなければならない。2. 体制順応主義的な思想と行動を解体すること。個人の行動の自由は、自分自身の自立的な選択によって量的にも質的にも拡張されるのであって、規則や官僚主義的な命令などによってではない。それは、チームワークと協力の体系的な実現を意味する。3. スポーツに政治的な関わりを持たせること。4. スポーツ普及運動の脱イデオロギー化。都合のいい考え方や幻想によるのではない、経験的な現実と啓蒙原理に基づいたスポーツ理解<sup>10)</sup>。

スポーツは労働か。スポーツ、特にオリンピックなどのトップレベル・スポーツはもはや労働と同じ構造と性格を持ってしまっており、スポーツはそれから脱却し、解放されなければならない、というのがリガウアの叫びである。このリガウアの主張に対して、グートマンほかの人々が、部分的に賛同しながらも批判的な見解を提示している。次にそれを見ることにしよう。

## 2 スポーツの喜び

### ーグートマンの「ネオ・マルクスズム」批判ー

リガウアのテキストの四分の一の長さにわたる訳者序文において、グートマンは「スポーツと労働」をいかに理解し評価したのかを確認しよう。

リガウアの『スポーツと労働』についてグートマンは、「マルクス主義の伝統に立ち、スポーツを社会を映し出す鏡と捉え、競技者を現代のヒーローとして打ち立てるニーチェ的試みへのネオ・マルクス主義からの応答である<sup>11)</sup>」と言う。「ネオ・マルクス主義」と

いった規定は、アドルノ、ハーバーマスといった人々を一括してフランクフルト学派などと呼んでしまうのと同様の問題をはらんでいるのではあるが、その危険性は念頭に置いておいて、思想史的な位置づけの確認の意味で、グートマンの解説に耳を傾けておこう。

グートマンによれば、「ネオ・マルクス主義はマルクスとフロイトを結び付けようとしたのであり、代表的な思想家は、アドルノ、フロム、ホルクハイマー、マルクーゼらのフランクフルト学派である。彼らの批判を単純化してみれば、このようになる。つまり、マルクスは産業資本主義を、資本家による労働者の経済的搾取のシステムと呼び、それからの解放を表明したが、しかし、心理的操作の可能性を過小評価していた。フランクフルト学派は、資本主義の予想外の長命の不思議を解く鍵を、フロイトの心理分析理論、特に無意識の発見に求めた。フロイト理論は、労働者の被搾取の忍従を説明するだけでなく、労働者の勤勉な労働意欲ならびに性への抑圧についても言及した。マルクーゼによれば、抑圧された性のエネルギーが労働において解放され、それが資本主義にとって有効であった。つまり、ヴィクトリア朝における性の抑圧と産業資本主義の間には必然的な関係があるというのだ。ネオ・マルクス主義者たちは近代スポーツに対して非常に否定的な見解を導き出しており、それが、例えばヴォールらのマルクス主義者と決定的に違っている<sup>12)</sup>。

このようなネオ・マルクス主義のラディカルなスポーツ批判の最初の体系的な試みが、リガウアの『スポーツと労働』だとグートマンは言う。そして、「スポーツ批判は古くから多々あるが、リガウアのこの著作はスポーツの本質に対してなされた極めて効果的な批判である。彼の批判は、伝統的に多くの知識人がなしたような身体的活動への忌避からきているのではなく、遊戯の重要性への信念に基づいている。遊戯は労働世界に取って替わるべきものではなく、その鏡の役目を果たしているというのだ<sup>13)</sup>」と評価的な措辞を呈する。

しかしながら、グートマンは、リガウア（と言うよりもネオ・マルクス主義）に対して、基本的には批判的な立場にある。「スポーツと労働が構造的に同質であるという結論を導くには、リガウアの論は十分ではない」とグートマンは言う。「スポーツは遊戯の世界の一部であり、それ自体目的であるという考え方を真剣に取り上げなければならない。競技者の動機、意識が重要である。或るものが仕事か遊びかということはその当事者の意識による。トップレベル・スポーツへの参加は遊戯の一形態と見ることができるし、自己実現の体験とも言えるのだ」。そして、さらに経験的な

データまで引いて、「ネオ・マルクス主義者が言うようにスポーツが本当に抑圧の装置であるとするならば、社会的に恵まれた人々が好んでそれに参加することがうまく説明できない。おそらく近代スポーツは抑圧の装置ではなく、豊かな人々、教育を受けた人々が求める自由や自己実現のための機会なのではないか。スポーツには、熱狂、喜び、自己実現が確かにあり、それらは〈誤った意識〉として片付けられない<sup>14)</sup>」とネオ・マルクス主義批判を展開するのである。

グートマンは、この訳本『スポーツと労働』を出す3年前に、同じ出版社から『儀式から記録へ：近代スポーツの本質』という著作を出版している。この本はドイツ語版（1979）や日本語訳（1981）<sup>15)</sup>も出て非常に有名であるが、上に示された批判の論点は、すでにこの著作において詳しく検討されている。その要点は次の記述に見ることができよう。すなわち、「ネオ・マルクス主義者の観点からすれば、近代スポーツは自由の敵である。近代スポーツは、その本質的な特性において、非人間的な社会的組織体の縮図だというのだ。人間精神の無限な可能性は破壊され、〈一次元的人間〉という〈人間性を喪失した〉枠組みにまでおとしめられている。われわれはこの種の議論を考察し、それが誇張であること、せいぜい部分的にしか妥当しないことを明らかにした。近代スポーツは、不完全なものであっても、相対的な自由の領域である可能性を持っているのだ<sup>16)</sup>」。要するにグートマンは、何人たりとも否定しえない「スポーツの喜び」が、確かにスポーツにはあると言うのだ。

グートマンもリガウアも、近代スポーツの性格として、合理化、専門化、官僚主義化、数量化について語る。リガウアにとっては、それらは否定的な契機であり、スポーツの解放のために乗り越えられなければならない問題点である。しかし、グートマンは、基本的には、それらの性格を近代スポーツを特徴づけるものとして記述するだけであり、それらが悪いことだとは言わない。かといって、グートマンはそれらを肯定的に眺めているブルジョア理論家の一人だなどと言うとすれば、それはグートマンを誤解してしまうことになるだろう。グートマンも、現在のスポーツのシステムに多くの問題点があることは認めているのであり、例えば、世界記録を無限に更新する競技者の努力は是なのか非なのか、このまま行ったらスポーツはどこへ行ってしまおうのかは、現実的にわれわれが直面しつつある問題であることは間違いない。グートマンは、さしあたり、じっと我慢して見守らなければならないというポーズしか取らない。しかし、やはりグートマンも、リガウアによって指摘されたような諸問題を基礎

に、現実のスポーツのあり方について何らかの建設的な議論が必要であることを感じてはいる。それが、おそらく、わざわざ『スポーツと労働』を翻訳した理由であろう。

グートマンが訳者序文の中で「アメリカ人の読者がリガウアの著作に戸惑いを感じるとすれば、その理由の一つは、社会理論へのアメリカ人的な（プラグマティックな）疑問視であり、さらにリガウアの視点の根本的な性格にある。彼はものごとの根本にまで遡っているのだ<sup>17)</sup>と述べていることに注目したい。そのような「ものごとの根本」にまで問題意識が到達するならば、マルクス主義だとかネオ・マルクス主義だとか、あるいはフランクフルト学派だとかいったレッテルは、さしあたり重要性を失うであろう。リガウアが多くの批判に答えて書いた第2版のあとがきにおける次の文章は、リガウアからグートマンへバトンは渡され、さらにその先にまで運ばれなければならないことを示唆しているであろう。「私〔＝リガウア〕が『スポーツと労働』において取り上げた問題は、スポーツは社会的な制度としても個人的な活動としても汚染などされていないという理論の展開なのである。私はそのような理論の展開に疑問を付し、スポーツの解放された変化と進展のために批判的な反省を読者に促したかっただけなのである。スポーツは社会的なコンテクストあるいは社会環境と密接に関係しているのであり、それ〈以上〉のものではありえないのだ」。さらに「外的な統制から完全に自由である社会的労働といったユートピアの可能性がないがゆえに、私の〈スポーツの新しい理解〉は抽象的で不満足なものに留まらざるを得なかった。現在のシステムに代わり得るのは〈スポーツの行動の労働と似た構造を解体すること〉ではなく、スポーツと労働を、自立性と自己決定という社会的条件のもとで統一することであるかもしれない<sup>18)</sup>」。

### 3 遊戯論に向けて

「スポーツは労働か否か」といった問題を考察する場合、それは「AはBか否か」といった一種の比較の問題として考えることができる。スポーツというのはかくかくしかじかのものである、一方、労働というのはこれこれしかじかのものである、両者を比較する、その結果、スポーツは労働である、あるいはスポーツは労働ではないという判断ができる、というわけだ。『スポーツと労働』の著者リガウアも、基本的にはこの方法を取っており、スポーツは労働である、正確に言えば、スポーツと労働は類似する行動システムであ

る、という結論を導いている。その理由は、スポーツにも労働と同様の諸特徴が見いだされるということだ。

論理的に考えた場合、リガウアの試みには、まずこの方法的なレベルで疑問が提示されるであろう。「スポーツは労働か否か」という問いには、そのような比較といった方法が妥当なのだろうか。両者の間に単純な比較が成立するためには、当然のことながら、それらは同じカテゴリーの上に乗っていないなければならない。「スポーツと労働」に対してなされた批判としてリガウア自身が取り上げた第一点が「労働」の概念の曖昧さであるが、それは、リガウアが「私の労働の概念はあまりに一般的すぎたし、歴史を考慮に入れていなかった。スポーツと労働の社会学的分析において議論を抽象的な社会関係に限定するのは十分ではないことを認めておこう<sup>19)</sup>」などと反省する問題であるよりも、まずカテゴリーの誤謬を犯してはいいないかに気づくべき問題なのである。この視点がない限り、例えば労働の概念を産業資本主義のそれと仮に限定したとしても、産業資本主義の現実の中でどのようなスポーツが実際に職業として成立していたかなどという（社会学的な？）観察はできるにしても、スポーツと労働の一般的关系は明らかになりはしない。初期資本主義のそれ、後期資本主義のそれ、あるいは中世封建社会のそれなどと渉猟の範囲を広げていっても、問題は解決しないことは言うまでもない。

ところで、常識的な見解において、労働と遊戯が対局的な位置関係において捉えられていることは、改めて言うまでもないであろう。コインの表と裏のようなものと考えられるわけだから、労働について考察することは実は遊戯について考察することでもある、また逆も言える、といった事情がそこにはあるのだ。リガウアの著作においても、遊戯ではない労働が問題にされていたわけだ。リガウアも指摘していたように、「スポーツと遊戯」というテーマは、ディームの論に代表されるように、これまでのスポーツ論において非常にポピュラーなものである。たいていホイジンガやカイヨワが引用されて、スポーツも遊戯の一形態である（あるいはそうあるべきだ）というスポーツ＝遊戯論が展開される。そういった（リガウアに言わせればブルジョア・イデオロギーの）スポーツ論への批判が、スポーツ＝労働論というわけである。ここに、スポーツ、遊戯、労働という三契機が浮かび上がり、二極分離ではなく、これらの調和を図ろうとするような論も登場している。例えば、フォルクヴァインの「スポーツの新しい理論に向けて<sup>20)</sup>」などといった試みがそれである。彼女はマルクーゼの論を基礎に、伝統的

なスポーツ＝遊戯論と「新左翼」のスポーツ＝労働論を乗り越える考え方として「遊戯的スポーツ (playful sport)」論を展開する。マルクーゼにならって、労働となってしまうスポーツを遊戯に変形しようというわけだ。ここに労働論と遊戯論の接続が可能であろう。

このようにスポーツ論－労働論－遊戯論の連関が図られれば、先に指摘されたカテゴリーの問題の重要性が如実になる。スポーツと遊戯の問題をめぐるこの非常に重要なポイントを、筆者はすでに指摘したことがある<sup>20</sup>が、簡潔に言えば、スポーツ、それもいま問題になっている近代スポーツと「遊戯」という概念は異なるカテゴリーの位相にあるということであった。それゆえに「スポーツは遊戯かどうか」という設問には単純には答えられないのであり、答えるとすれば、スポーツは遊戯でもありうるし、そうでない場合もありうるなどということになってしまう。仮に、遊戯という概念を労働と対立するものとする常識の見解を取ってみれば、アマチュアの野球は遊戯だが、プロ野球は遊戯ではない、逆に見れば、アマチュアの野球は労働ではないが、プロ野球は労働であるということになって、同じ野球というスポーツが遊戯にも労働にもいかようにでもなりうるのである。つまり、野球という一定の構造を持ったスポーツがあって、それがアマチュアかプロか、すなわち遊戯か労働かというのは、その一定の客観的な構造を持ったスポーツへの「人々の関わり方」ということになるのである。この論理的關係を見誤ってしまうと、スポーツ・遊戯・労働がごちゃごちゃになってしまい、見かけだけ複雑で知的にはほとんど無益な議論になってしまう。

「スポーツ」と「遊戯・労働」をカテゴリー的に切り離して考えなければならないとすれば、スポーツに対して、それ自体が目的であるという遊戯の性格を認めることができるとか、逆に達成原理という労働の性格を認めることができるとかいったことで、スポーツを遊戯だ労働だと同定することには慎重にならなければならないことに気づくであろう。そのような性格を認めることができると言ってしまふ前に、その比較の対象に対して判断を下す人々の念頭にある「遊戯」そして「労働」という観念が検討されなければならないのだ。「遊戯」とは何か、「労働」とは何か、それらはいかに捉えられるべきなのか。ディームの論もリガウアの論もこの問いを不問にし、それぞれ自分の思いを前提にしてしまっている。グートマンは、その問題の所在に気づいてはいるが、自らはその前にたたずんでいるだけである。現代社会におけるスポーツについて考えるわれわれにいま必要なのは、スポーツについ

ての新しい考え方であるよりも、むしろ遊戯や労働についての新しい考え方なのである。このような問題意識のもとに成立してくる遊戯の問題の論究が、筆者の言う「遊戯論」であるが、同様の問題系の中にある「労働」の問題もこの遊戯論の射程において理解するのがわれわれの立場である。その場合、極めて有効な示唆を与えてくれるのが、今村仁司の論<sup>21</sup>である。

今村は、未開社会、古代ギリシア、西欧中世、ならびに近代の労働観を素描し、近代の労働経験の批判的考察を試みている。それによれば、近代労働観と前近代の労働観の間には、はっきりとした断絶線が走っているという。つまり、前近代は労働に対して徹底的に否定的であり、他方、近代においては労働は肯定的に捉えられ労働の社会的地位が格上げされたという。前近代は近代よりもはるかに長いが、なぜ人類はその長き年月、労働を格下げしつづけてきたのか、そしてなぜ近代において労働は格上げされたのか、前近代の「格下げ」的労働観の背後にある思想的背景を明らかにすることによって、近代の労働観への批判的省察が可能であると今村は考える。そして、古代ギリシアの見解に基づいて、労働 (labour)、仕事 (work)、行為 (action) を区別する。

労働とは、「人間が自然的＝生物的な存在であるがゆえに、必ず (必然的に、余儀なく) おこなわなければならない生命的活動である。生物体であるかぎりでの人間が生物的に生きるためにおこなわねばならない活動が労働であるのだから、労働は何よりもまず自然的必然性に束縛された活動である」。ここから、労働は基本的に奴隷的労働であるという視点が生まれる。仕事とは、「古代ではテクネーないしポイエーシスとよばれ、道具的制作的活動であり、道具を利用して、消費財と異なる耐久的事物をつくる」ことである。「仕事はポリスの生活の基盤をつくる」のであり、「奴隷的労働とちがって、アレテーア (隠されていないこと、真理の光) と直結している」。そして、「仕事が用意した物的な『共通的事物』=『共通世界』を土台にして、人と人との公共的關係を運営する活動が行為 (アクション) またはプラークシスである。・・・プラークシスは何よりも言説的・説得的活動であり、現代的用語を使っていえば、言説的意思疎通行為 (コミュニケーション) である。プラークシスは理想的には社会関係を非暴力的に運営し、物的な公共的事物の耐久性・永続性と同様に、永続的な政治的社会的関係を構築することである<sup>22</sup>」。

このギリシア的な区別を基礎にして、今村は、社会主義的な (あるいは共産主義的な) 「労働の解放」ではなく、「(奴隷的) 労働からの解放」を主張する。そ

して、「自然必然性の領域の労働と自由な活動はあくまで対立する。労働は他の何ものと結合されなければ、自由な活動への転換はありえない。この性質転換のための媒介となるのが遊戯性である」と、労働から遊戯への連関的な移行を指摘し、改めて、遊戯性と結合した「労働」を「仕事」と規定する。「人間的な諸活動が奴隷の性格を離脱し、狭義の必然的労働すらその労働的性格を離脱し、遊戯性をエーテルとした自由な活動（古代のプラークシス）へと転換させることこそ、たとえ現在ではユートピアであっても、手放すことのできない理念たりうる<sup>24)</sup>」のだ。さらにE. R. リーチの言う儀礼・神話に体现される「美学」を、労働と結合した遊戯性であるとする指摘<sup>25)</sup>は、われわれにとってはまことに興味深い。

言うまでもないが、今村は、労働を廃止してその代わりに遊戯などを主張しているのではない。厳密な用語法によれば、問題は遊戯ではなく「遊戯性」なのだ。この時点において、そしてこの意味において、労働からの解放論は遊戯論へと連続していく。スポーツの起源が遊戯なのか労働なのか、はたまた戦争なのかなどといったことはいま、少しも問題ではなく、すでに遊戯論の観点から指摘されている<sup>26)</sup>ように、一定の特殊な構造を持ったスポーツという事象が遊戯性を内在させているということこそが重要なのである。とすれば、労働から解放されて遊戯性と結合した「仕事」へ向かうために、スポーツは一つの可能性を持っていると言えるのではないか。もちろん、現在のスポーツの一部はすでに現実的に労働と化しているのであるから、スポーツに無条件に可能性を期待することなどはしない。また今村の論のポイントである「自然必然性」についても、スポーツに関してさらに検討されなければならない課題が残っている。そのためには、おそらく周到な身体論が企てられなければならない。

さて、われわれの議論に重ねて、参照すべき著作がさらにある。福田定良の『仕事の哲学<sup>27)</sup>』である。次にそれを取り上げ、そしてリガウア、さらにカール・ルイスにまで帰って、本稿をまとめることにしたい。

## 結論にかえて

一陸上競技はカール・ルイスにとって「私の仕事」である一

福田は、「私の仕事」と「自分の仕事」を区別する。「私の仕事」とは私の能力を発揮し続けることができるような、仕事の面白さを感じ続けることができるような持続的活動のことである。これに対して、職業・生業として私が携わっている仕事は「自分の仕事」で

ある。「自分の仕事」というのは、必ずしも職業ということだけではない。例えば、学校や会社や国のために戦うアマチュア・スポーツ選手のスポーツ活動も「自分の仕事」になりがちだ。しかし、スポーツは本来、「私の仕事」の一つである、と福田は言う<sup>28)</sup>。学校や会社や国のために戦う人々も、それだけの能力のない人々も、スポーツ活動の面白さを感じ続けることはできるからである。

この区別は、日常的な仕事観、遊び観の隘路を越えている。仕事＝職業＝面白くないもの、遊び＝趣味＝面白いものなどという日常的な先入見では、仕事が遊びのように面白いか、遊びが苦痛でたまらないなどといった現実を少しも理解することができないのだ。福田は、別の理由から一応仕事と遊びを区別し、われわれの生きる場を仕事・生活・遊びと捉えるが、このいずれもが「私の仕事」の成立する領域だと言う<sup>29)</sup>。彼の論にならえば、例えば筆者のような或る大学教師がいるとすると、その人にとって「文部教官」というのが「自分の仕事」（職業）であり、「文筆業」「ギタリスト」「スキーヤー」というのが「私の仕事」だということになる。福田のこの区別は大変理解しやすいが、福田自身次のように述べて、この考え方は注意すべき微妙な問題を含んでいることを指摘していることは理解しておくべきである。すなわち、「むしろ、私の仕事はスポーツ・芸術（芸能）・学問に属するような特定の仕事をすることであるよりも、おたがいに自分の仕事を見直すことができるような人間関係、言いかえればおたがいに私同士としてふるまうことができるような人間関係を作ることから始まる。この他人は原則として『自分の仕事』を通じてふれあう人たちであって、私たちはこの他人に働きかけて私の能力を人間的な（私同士としてふるまえるような）働きとして発揮する。これが『私の仕事』の特質である<sup>30)</sup>。これは、先の今村のプラークシス＝コミュニケーション論に重なっていくものであり、「古代の意味での『仕事』（テクネー＝ポイエーシス）と『自由な活動』（プラークシス）が、古代的労働観とは逆に、融合すること、これが未来に展望される仕事である<sup>31)</sup>」という考えと一致する。

さて、このように考えてくると、カール・ルイスにとって、百メートル走や走り幅跳びは、何よりもまず「私の仕事」であるはずだろう。そして、彼は「自分の仕事」を持たなくてもすむ幸福な人なのだ。それを可能にしているのは、現代という時代と社会である。以前はそれは不可能であったし、ひょっとしたら今後也不可能になる時代が来るかもしれない。この問題は、スポーツというような人間の行為の根源的価値の



問題に関わるものであり、社会哲学的な視点を越えた  
いわば積極的な意味での形而上学的な省察を必要とする。  
それは本稿とは別の問題だと言わなければならないが、  
すでに筆者はその試みを行っていることを付記しておこう<sup>32)</sup>。

リガウアが『スポーツと労働』において指摘したスポーツの  
(奴隷的)労働化という事態を観察して、スポーツは素朴な遊びの  
段階に戻るべきだ、競争のないスポーツが理想なのだなどは  
直ちに言えないことは明らかであろう。それは、一つには、  
本来「関わり方」の問題である労働という態度や状態を  
スポーツの構造の契機と取り違えてしまっているからであり、  
さらに、奴隷的労働を越えるべき仕事の観点を失っている  
からである<sup>33)</sup>。

最後に、学問の広がりや眺望から指摘しておきたい  
ことがある。本稿で取り上げた問題は、従来はスポーツ  
社会学のテーマと考えられているであろう。この領域の  
研究の取り組みには敬意を払うべきものも少なくない。  
すでにリガウアへの言及もなされている<sup>34)</sup>。しかし、  
本稿で明らかのように、社会学のテーマの多くは哲学的  
な問題に、さらには美学的な問題にまで通じているのだ。  
スポーツ哲学とスポーツ社会学の間にこれまで何らかの  
垣根(あるいは壁)があるとすれば、それは不幸である。  
また、今村の労働論は、これまで論じられることの少  
なくなってきた「労働」に新たな光を投げかけ、「行為の  
社会哲学」を目指すものである。その試みの方向への一  
つの視点として、スポーツという社会現象を考察のオル  
ガノンとしうるものが、本稿の考察から確認できるであ  
らう<sup>35)</sup>。

## 註

- 1) 橋本治「蛙の蹠のアマチュアリズムと自己表現」『よむ』1992年7月号、50-51頁。
- 2) 筆者は拙著「商売としての野球選手」(『不死鳥』広島大学レクリエーション委員会、第30号、1991、9-12頁)というエッセイにおいて、ここで指摘されている問題のエッセンスをすでに示唆している。
- 3) Hearn, F. "Toward a Critical Theory of Play" *Telos*, vol. 20, 1976/77, pp. 145-160. McCormick, P. J. *Modernity, Aesthetics, and the Bounds of Art*, Ithaca and London: Cornell University Press, 1990, 参照。ここで言う「批判」は、もちろん学問的な方法としての自覚的なそれであって、悪口や非難などと誤解してはならないことは言うまでもない。そのような批判が、本稿での問題に限らず、いまスポーツ科学や教育あるいは教育学にとって必要であることは、声を大にして叫ばなければならない。

- 4) 井上春雄『アマチュアリズム』道遥書院、1961初版、1975第7版、178頁。
- 5) Rigauer, B. *Sport und Arbeit*, Frankfurt: Suhrkamp, 1969, 1979. Trans. by Guttman, A. *Sport and Work*, New York: Columbia University Press, 1981.
- 6) Rigauer, *Sport and Work*, p. 1. 以下、リガウアからの引用は要約である(逐語訳での引用ではない)。
- 7) *Ibid.*, pp. 14-17.
- 8) *Ibid.*, pp. 18-79.
- 9) *Ibid.*, pp. 98-101.
- 10) *Ibid.*, pp. 103-105.
- 11) Guttman, Translator's Introduction, *Sport and Work*, p. ix. 以下、グートマンの訳者序文からの引用も要約である。
- 12) *Ibid.*, pp. x-xii. ただし、スポーツへの否定的見解は、このリガウアのテキスト *Sport and Work* に関する限り少々疑問である。グートマンの判断は「ネオ・マルクス主義者」には妥当するかもしれないが、リガウアには必ずしも当てはまらない。それはグートマンも気づいているはずである。
- 13) *Ibid.*, pp. xii-xiii.
- 14) *Ibid.*, pp. xxiii-xxxii.
- 15) Guttman, A. *From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports*, New York: Columbia University Press, 1978. *Vom Ritual zum Rekord: Das Wesen des modernen Sports*, Schorndorf: Verlag Karl Hofmann, 1979. グートマン(清水哲男訳)『スポーツと現代アメリカ』TBSブリタニカ、1981.
- 16) Guttman, *From Ritual to Record*, p. 157. ただし、引用は要約である。
- 17) Guttman, *op. cit.*, p. xiii.
- 18) Rigauer, *op. cit.*, p. 110-111.
- 19) *Ibid.*, pp. 108-109.
- 20) Volkwein, K. "Toward a New Theory of Sport" Unpublished Thesis presented at the PSSS Conference, Washington DC, 1989. なお、彼女は "Toward a New Conception of Sport: Herbert Marcuse's Theory of Play" という博士論文を1989年に書いており、上の研究発表はこれが基になっている。
- 21) 拙著『スポーツの美学』不昧堂、1987。自立したテーマとして取り上げたのは、日本体育学会での研究発表「スポーツ理解のための遊戯論再検討序説—シーラーの〈遊戯〉の概念をめぐる—」(於: 横浜国立大学、1989)。なお、この種の議論の本質とその新しさが見いだせない人々が現在の「体育学」には多い。このような状況のままでは「体育学」の未来はない。この領域には批判すべきことが山積しているが、著者はできるだけ近い

- 将来「体育学の間違い」という論考をまとめたとい、否、まとめなければならないと思っている。
- 22) 今村仁司『労働のオントロジー：フランス現代思想の底流』勁草書房，1981。同『仕事』弘文堂，1988。
- 23) 今村『仕事』171-178頁。labor (labour)=労働，work=仕事という区別に沿うならば，*Sport and Work* は『スポーツと仕事』となるのではないかという疑問を持つ人がいるであろう。グートマンはArbeitの訳語にworkを当てているが，ドイツ語のArbeitはworkとlaborの両方を意味しており，グートマンはworkとlaborを慣用的な用語法のレベルでしか区別していない。リガウアの著作ではマルクス主義的な労働 (Arbeit; labor/work) 概念が基底にあり，また，今村の論もマルクスの読み直しが念頭にあるのであって，それらを考慮すれば，まずは上のworkは「労働」として考察を始めるべきである。これらの，ヨーロッパ語にはない，あるいはヨーロッパ語では希薄な言葉のニュアンスの差をうまく生かして，考察対象の重要な分節化を図る可能性が，労働-仕事，あるいは遊戯-遊び，という日本語にはあるかもしれない。なお，後で取り上げる福田は，労働は社会科学の概念，仕事は哲学の概念としている。
- 24) 今村『仕事』213-215頁。ブランクシスへの転換は，体育に関するアリストテレス研究との接点を持ちうるであろう。林英彰『体育と倫理の関わりについて—アリストテレス倫理学に基づく批判的現状分析—』『日本体育学会第42回大会号A』94頁，参照。
- 25) 今村『仕事』，214頁。
- 26) 拙著『スポーツの美学』不昧堂，1987，および滝沢克己『競技・芸術・人生』内田老鶴園新社，1969。
- 27) 福田定良『仕事の哲学』平凡社，1978。さらに考えるための参考文献として以下のものを上げておこう。清水正徳『働くことの意味』岩波新書，1982。別役実『当世・商売往来』岩波新書，1988。ブチ (今村仁司・松島哲久訳)『労働の現象学』法政大学出版局，1988。Burke, R. "Work and Play" *Ethics*, vol. 82, 1971, pp. 33-47. Hinman, L. M. "On Work and Play: Overcoming a Dichotomy" *Man and World*, vol. 8, 1975, pp. 327-346. Manley, K. E. B. "Parody: Simultaneous Work and Play" In: Blanchard, K. (Ed.) *The Many Faces of Play*, Illinois: Human Kinetics Publishers, 1986, pp. 133-140. Blanchard, K. "Play as Adaptation: The Work-Play Dichotomy Revisited" In: Mergen, B. (Ed.) *Cultural Dimensions of Play, Games, and Sport*, Illinois: Human Kinetics Publishers, 1986, pp. 79-87.
- 28) 福田，前掲書，126-131頁。
- 29) 同書，126頁。
- 30) 同書，227頁。
- 31) 今村，『仕事』216頁。
- 32) 拙著『スポーツの美学』不昧堂，1987。
- 33) ただし，リガウアにはこのように言ってしまうところがある。リガウアが『スポーツと労働』のあとがきで述べているような見解 (註18)の部分を考慮すると，本稿でわれわれが指摘した労働→仕事論の可能性をリガウアに見ることができなくもないからである。しかしながら，「疎外」概念の理解の一面性 (pp. 109-110) など，リガウアの論には疑わしい点も多いことも確かである。ところで，本稿で取り上げた問題と近いところでスポーツの社会哲学的な研究をしている研究者にアメリカ，テネシー大学のモーガンがいる。彼もまた，ここで筆者の指摘に通じるスポーツの形式的構造の分析とスポーツの批判的考察の重要性を主張する。(例えば Morgan, W. J. "Social Philosophy of Sport: A Critical Interpretation" *Journal of the Philosophy of Sport*, vol. 10, 1984, pp. 33-51. Morgan, W. J. "Play, Utopia, and Dystopia: Prologue to a Ludic Theory of the State" In: *Philosophic Inquiry in Sport*, Illinois: Human Kinetics Publishers, 1988, pp. 419-430.) それはスポーツ社会学に対する一つの批判になっている。モーガンは緻密な議論を展開する人であるが，しかし，こと遊戯論に関しては彼の議論はリガウアのレベルに留まっている。先に言及したフォルクヴァインはモーガンのもとで学んだ人であり，いわば師弟関係にあるのだが，残念なことにモーガンの構造分析論はフォルクヴァインに十分伝わっていないし，逆にフォルクヴァインのplayful sportにモーガンは疑念を抱いている。なぜならば，モーガンにとって，現在のsportは完全にplayと対立的に位置しているからである。
- 34) 例えば，影山健『スポーツの政治的機能』菅原禮編著『スポーツ社会学の基礎理論』不昧堂，1984，191頁。ただし，ここではリガウアとグートマンについてはほんの少し言及があるだけで，それらの論の研究にはなっていない。また，「スポーツ文化とポストモダン」と題するヘニング・アイヒベルグと山口昌男の対談 (『へるめす』第37号，1992，141-160頁)で，アイヒベルグがリガウアのこの書物に言及している。アイヒベルグはリガウアへの批評として*Der Weg des Sports in die industrielle Zivilisation*. (Baden-Baden: Nomos Verlag, 1973) を書いており，それはグートマンによっても取り上げられている (Guttman, *From Ritual to Record*, p. 85) が，本稿では検討することができなかった。
- 35) その際，リガウアの論を好意的にかつ積極的に解釈すれば，リガウアが指摘する，批判理論の重要性，社会を映し出す鏡としてのスポーツの理論的機能，そして実践のための安易なガイドブックを求めようとする思潮への批判，といった観点が，重要な視点として生きてくるであろう。